第5章

まとめと今後の課題

第５章　まとめと今後の課題

１　今回の取組のまとめ

注意はすべての認知機能の基盤であり、集中力や注意力の課題は就労において大きな影響を与えます。また、平成 30 年度から令和４年度上期までに職業センターの職場復帰支援プログラムと就職支援プログラムを利用した 50 名のうち 44 名が注意障害の診断を受けているなど、注意障害を有する高次脳機能障害者は一定数存在し、就労支援において注意障害への対応は重要な支援の１つと言えます。

今回は、イギリスの OZC で実施しているグループセッションのうち、注意とゴールマネジメントのグループセッションをもとに、１回 90 分×５回からなる注意障害に対する学習カリキュラムを開発し、試行実施しました。

開発したカリキュラムは、５回のグループワークとして構成し、グループワークは、注意の機能について知識を付与する「講義」、注意機能に対応した練習課題や、異なる環境下で課題に取り組む体験を通して自分の注意の特徴への気づきを促す「体験ワーク」、自分の注意の特徴や有効な対処手段について受講者同士で発表し合う「意見交換」、次回までに取り組む「プチトレーニング」も含む包括的な内容となっています。

講義、体験ワーク、意見交換や、プチトレーニングの課題として取り組む自己観察日誌を通して、第一に自分の注意の特徴に対する気づきを得ることで、また、第二に職業的課題への対処手段を身につけることで、注意機能の問題に対する「メタ認知スキルの向上」を図っていくことを最大の目標にしています。

開発したカリキュラムの効果測定の結果、客観的指標である神経心理学的検査（CAT）の結果からは、一貫した効果（変化）が認められなかったことは上述したとおりです。

一方、今回のグループワークへの参加を通して、受講者が自分の注意の特徴を理解、意識し対処できるようになり、作業時にはそれぞれの受講者が画面拡大やルーラー等を有効に活用し職業的課題に対処できるようになったことは、一定の効果と捉えることができます。

実際に、質問紙への回答からは、受講者自身が自分の注意の特徴に対する気付きを得られたことを示す声が多く聞かれました。以上のことから、上述したカリキュラムの二つの目標を、すべての受講者が達成することができたと言えます。

達成の要因は、今回のカリキュラムの特徴である、受講者が「講義」だけでなく「体験ワーク」や「プチトレーニング」を通して体験しながら自分の注意の特徴を確認することができたこと、また他の受講者との「意見交換」を通じ納得感が得られ、積極的な対処への動機づけが高まったことなどが考えられます。

２　今後の課題

本グループワークは、「講義」、「体験ワーク」、「意見交換」、「プチトレーニング」から構成されています。これらのうち「講義」、「体験ワーク」、「意見交換」は、休憩を挟みながらも１回につき 90 分間の内容となっています。このため易疲労性が課題となっている多くの高次脳機能障害者にとって、情報量の多さや時間の長さなどの負荷が高い可能性があると言えます。今後、カリキュラムの構成要素のモジュール化を行い、必要な要素のみ

を効率よく実施できる方法を検討することが課題となっています。

終わりに、本開発での事例は８名と少人数でしたが、開発の成果がより多くの事例で活用された結果を踏まえて、カリキュラムの改良を検討していくことも課題と思われます。